

犬・猫由来の人畜共通感染症



日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦

近年、さまざまな動物がペットとして飼育されており、癒やしを求める人間自身に彼らとの接触は大変意義があるものと思われれます。なかでも、特に犬や猫は昔からペットとして可愛がられていますが、気分によって、時に愛情表現かもしれませんが、咬みついたり、ふいに引っ掻いたりします。

本邦にはまだ正確な調査資料がありませんが、米国では動物による咬傷のために、年間100万人から200万人が医療機関で治療を受け、救急外来の受診者の約1%を占めています。しかし、軽傷者は医療機関を受診することが少ないと考えられ、真の発生率は不明です。

判明している範囲では、その80%は犬によるもので、受傷者の多くは若年男性です。一方、猫によるものは全体の5~19%を占め、受傷者の大部分は若年女性です。ある大規模な疫学調査では、受傷者の約4分の1が6歳未満であったと報告されています。

子猫がじゃれて、5歳の女の子の顔に引っ掻き傷ができ、まぶたも腫れているので目が心配だと受診された親子を最近、診察する機会がありました。

幸い角結膜や眼内には損傷がみられず、皮膚への抗生物質の塗布程度で、事なきを得ましたが、猫に引っ掻かれて角膜穿孔や角膜潰瘍を起こしたり、眼内炎を生じて眼球内容除去術に至った症例なども報告されていますので、安心できません。

猫の爪は細く非常に鋭利なため、角膜創の場合も含めて、組織の挫滅が少なく、縫合なしでも自然に傷は閉じやすいのですが、咬まれた場合、毎日新聞の「ご近所のお医者さん」欄でもしばしば話題にしていますが、通常29%から50%に創傷感染がみられ、その原因菌の50%以上に、パスツレラ・マルトシダという、猫の気道ないし消化管に常在するグラム陰性桿菌が検出され、本菌には一般に、ペニシリン系、第2、第3世代セファロスポリン、テトラサイクリンに加えてクロラムフェニコールの投与が有効とされています。

犬・猫の口腔内に常在しているカプノサイトファーガ属菌による人畜共通感染症の最新の情報が昨年秋、厚生労働省保険局よりもたらされましたが、本症が疑われた場合には、患者さんの臨床所見に応じて、早期に抗菌薬等による治療を開始することが重要となります。咬傷に対する抗菌薬としては、ペニシリン系の他、テトラサイクリン系や第3世代セフェム系抗菌薬が一般的に用いられます。本症は犬・猫による咬傷・搔傷以外に、傷口をなめられて感染した例も報告されていますので、要注意です。

潜伏期間は1~14日（多くは1~5日）で、発熱、倦怠感、腹痛、吐き気、頭痛などを前駆症状として発症し、重症化した例では敗血症が最も多く、その約26%は亡くなるとされています。血液培養が陽性になるのに数日を要することから、早期診断が可能な検査方法がありません。さらなる検討が必要です。

感染予防のためには日ごろから、犬や猫との過度の触れあいは避けるようにし、ペットと触れあった際には、手洗いなど確実にします。犬や猫に咬まれたり引っ掻かれたりした時には、傷口を石けんと流水でよく洗い、傷が小さくても感染する可能性がありますので、万が一の時、医療機関に咬搔傷歴を伝えられるよう、家族にも情報を伝えておきましょう。ペット由来の人畜共通感染症にご配慮を!!